

教材・支援機器活用実践事例フォーマット

実践年度・タイトル		平成29年度 知的障害特別支援学校におけるタッチパネルPCの相互通信システム構築の試み
授業について	教科名等	■国語 □社会 ■算数/数学 □理科 □生活 □音楽 □図画工作/美術 □家庭/技術・家庭 □体育/保健体育 □道徳 □外国語/外国語活動 □総合的な学習の時間 □特別活動 □自立活動 ■各教科等を合わせた指導 □その他の教科 □その他()
	単元・題材名	生活単元学習「つき組カラオケゲーム大会～カラオケに行こう!～」事前学習 ことば・かず「いろいろなかたち・いろいろなおと」
	授業の目標	生活単元学習「つき組カラオケゲーム大会～カラオケに行こう!～」事前学習 ○行き先や活動内容、レストランでのメニュー決める。○疑似体験(カラオケ)に自ら参加しようとする。 ことば・かず「いろいろなかたち・いろいろなおと」 ○図形の構成課題、音声を聞いて物を想起する課題、中長文の音読の課題の3つの学習に取り組む。
	観点別学習状況の評価の観点	■「知識・理解」 □「技能」 ■「思考・判断・表現」 ■「関心・意欲・態度」 □その他()
学習集団と子供の実態	学校・学部・学年・人数	□通常の学級 □通級による指導 □特別支援学級 ■特別支援学校 □就学前 ■小学生 □中学生 □高校生以降 □特定されない 小学部3・4年7名
	対象の障害	□視覚障害 □聴覚障害 ■知的障害 □肢体不自由 □病弱・身体虚弱 □言語障害 ■自閉症 □情緒障害 □LD(学習障害) □ADHD(注意欠陥/多動性障害) ■その他(ダウン症)
	子供の課題(特性・ニーズ)	□見る □聞く □話す □読む □書く □計算する □推論する □運動と姿勢 ■日常生活活動 □不注意 □多動性-衝動性 ■社会性・コミュニケーション □覚える・理解する □その他 事例児童1名 知的障害を伴う自閉症(愛の手帳3度)の小学部3年男児。 話し手に一定時間注視することが難しく、適宜言葉かけやサイン等の支援が必要である。 絵カード等の視覚的な支援を個別で行うことにより、集団に向けて言語や身体で自己表現
ICT活用について	使用した支援機器・教材の名称と画像	(使用機器等) ① 次の機器環境を構築する a. 音声化した仮想windows環境が構築されているMac PC b. 教室壁面設置用タッチパネル c. 全体共有用の大型ディスプレイ d. Mac PCと共有可能なiPad e. Mac PCとiPadを繋ぐ無線ネットワーク ② 画面の内容と操作をa,b,c,dの機器で共有し、「タッチパネルPC相互通信システム」を構築する。 ③ ②で構築された「タッチパネルPC相互通信システム」の試用を行う。使用ハードウェア:Mac mini 2.6GHz Dual Core i5 8GBメモリ 1TBHD Intel Iris Graphics(Apple) iPad 9.7インチ Wi-Fiモデル MPMGT2J/A (Apple)使用ソフトウェア:Parallels Desktop 13 for Mac Box (Parallels)PC-Talker10((株)高知システム開発) 使用コンテンツ:NHK for School 特別支援 電子黒板教材 http://www.nhk.or.jp/school/dcontent/tokushi1/
	活用のねらい	Aコミュニケーション支援(■A1意思伝達支援 ■A2遠隔コミュニケーション支援) B活動支援(■B1情報入手支援 □B2機器操作支援 □B3時間支援) C学習支援(■C1教科学習支援 ■C2認知発達支援 □C3社会生活支援) ○大型モニター・タッチパネルモニター・PCを接続した環境を構築し、画面情報の共有を図る。 ○タッチパネルモニターで操作した内容が大型モニターで全体に共有できるよう工夫する。 
授業に授業展開支援	授業展開と画像	○生活単元学習 メニュー決めでは、タッチパネルモニターを活用し、自分の写真を食べたいメニュー上に動かして決定するようになったところ、積極的に選ぶ姿が見られ、他の児童も写真が移動する様子を上モニターで「いいねー」「それかあ」などコメントをしながら見る様子があり、モニターを媒介にした児童同士のやりとりも生まれた。また、普段表出が難しい児童も、友達の活動を見て自ら希望するものを指し、タッチパネル上で操作することができていた。 疑似体験では、選んだ歌をふたつのモニターのどちらかを見て意欲的に歌う様子が見られた。当日も学習したことを生かして、見通しを持ちながら、友達と一緒に選んだり歌ったり踊ったり積極的に活動することができた。 ○ことば・かず 児童の実態に合わせ、図形の構成課題、音声を聞いて物を想起する課題、中長文の音読の課題の3つのコンテンツを用意し、タッチパネルの操作方法を教えながら回答に取り組んだ。児童は回答者がタッチパネルを操作して学習に取り組んでいる様子を観察しながら大型ディスプレイで回答を確認し、「あってます」「三角はこっち向きだよ」などの発言をしていた。回答者も他の児童を聞いて回答を修正するなど、システムを介して児童相互のやりとりが発生した。
効果・評価	子供の様子や変容および授業の評価	様々な授業や実践で活用したところ、大型モニターに表示されたスライドや写真に注目して、学習に参加している様子が見られた。 さらに、友達が学習している様子を大型モニターを通じて観察し、学習内容を理解している姿も見受けられた。また、自分から活動場所に向かい、タッチパネルを操作しようとする姿も見られた。 画面情報の共有を図ることにより、集中して活動に取り組んでいる姿があった。モニターだけでなく、手元のタブレットに画面を共有することも可能なため、様々なケースに対応できる。多様な実態の児童を支援するシステムとして、今後使い方のモデルなど、検証を重ねていくことが更に必要である。